

神山町における考古学的研究

考古班（徳島考古学研究グループ）

中村 豊¹⁾・岡山真知子²⁾・三宅 良明³⁾

1. はじめに

考古班は、「神山町における考古学的研究」をテーマに、大きく二つの調査研究を実施した。一つは、「神山町における古墳の調査」としての少童神社石棺^{わたつみじんじゃ}の発掘調査、もう一つは、「神山町出土遺物の研究」としての石器を中心とした実測調査である。前者は主に岡山真知子・三宅良明が担当し、後者は中村豊が担当した。

2. 神山町における古墳の調査

1) 調査の経過

期 日 1999年7月27日(火)、7月30日(金)～8月1日(月)

調査員 小林勝美、柏野寿一、三宅良明、市川欣也、下田順一、中川 尚、中村 豊、岡山真知子、福原智子、五十嵐大輔

調査協力 神山町教育委員会、神山町文化財保護委員会、神山町史編集委員会、少童神社（宮司森 登）、社会教育指導員横山隆弘、稲飯幸生、中山馨、植田亀雄

内 容 神山町所在の古墳の可能性があると、同町五反地に位置する少童神社裏の発掘調査と周辺の測量調査を実施した。

2) 少童神社の位置

少童神社は、神山町阿野五反地208番地1、208番地2、209番地に所在する神社である(図1)。社殿境内には板碑も数基立地する。神社裏に石棺らしい石が露出しているため調査してほしいとの要望が神山町文化財保護委員会よりあり、今回の調査対象として選び、発掘調査を実施した。少童神社は、鮎喰川^{あぐい}西岸で西から東に延びる尾根上に位置し、標高100mを測る。神社はこの尾根を切り開いて建築された。現社殿裏の石段上に石棺らしい石が位置していた。

3) 調査結果

まず、石棺と考えられる石を中心に周囲の測量調査を実施した(図2)。次に、トレンチを設定して発掘調査を実施した。発掘調査に先立って、少童神社宮司森登氏による丁寧な御祓^{はら}いもしていただいた。

1) 徳島大学埋蔵文化財調査室 2) 徳島県教育委員会文化財課 3) 徳島市教育委員会社会教育課

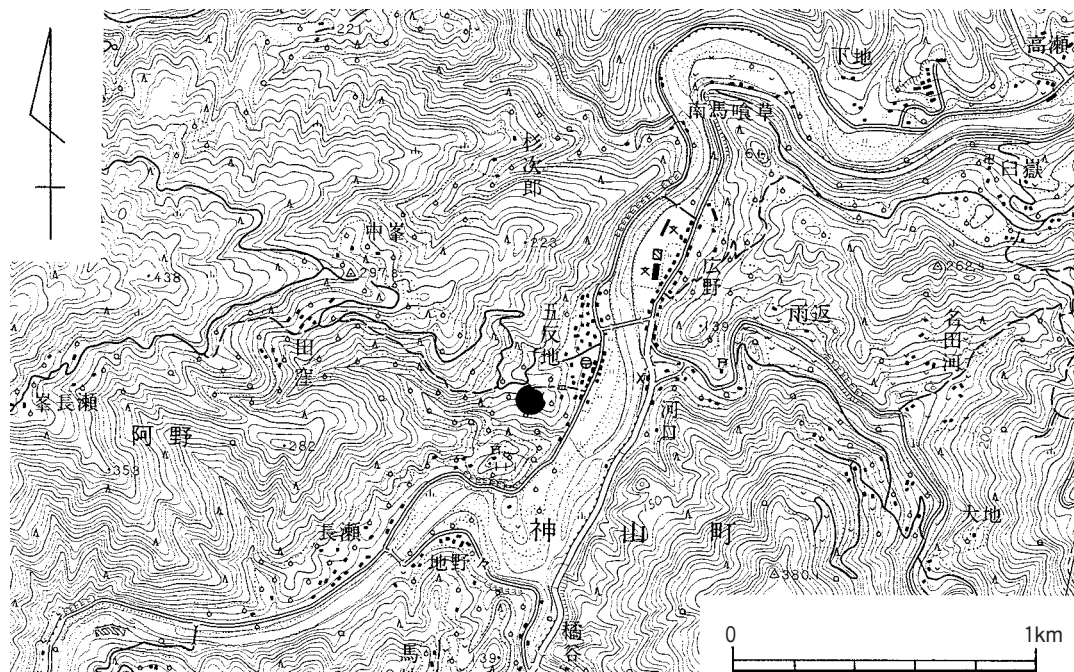


図1 少童神社の位置 (2.5万分の1『石井』)

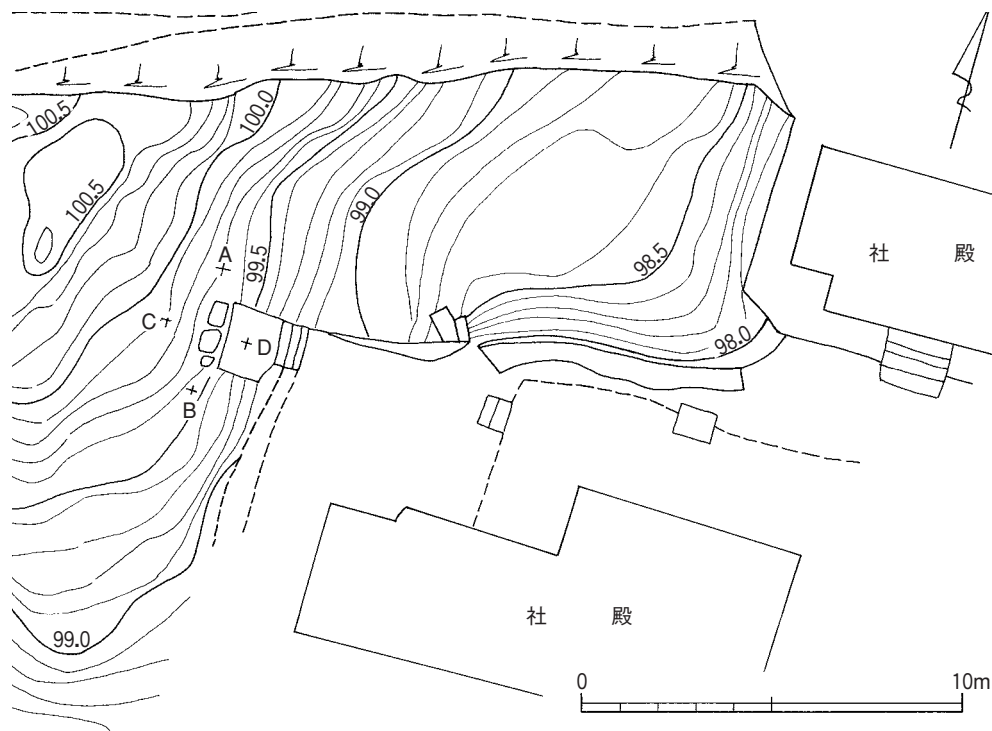


図2 少童神社周辺測量図

(数値は標高、単位；m、等高線間隔；10cm、アルファベットは発掘調査の基本柱の位置を示す。)

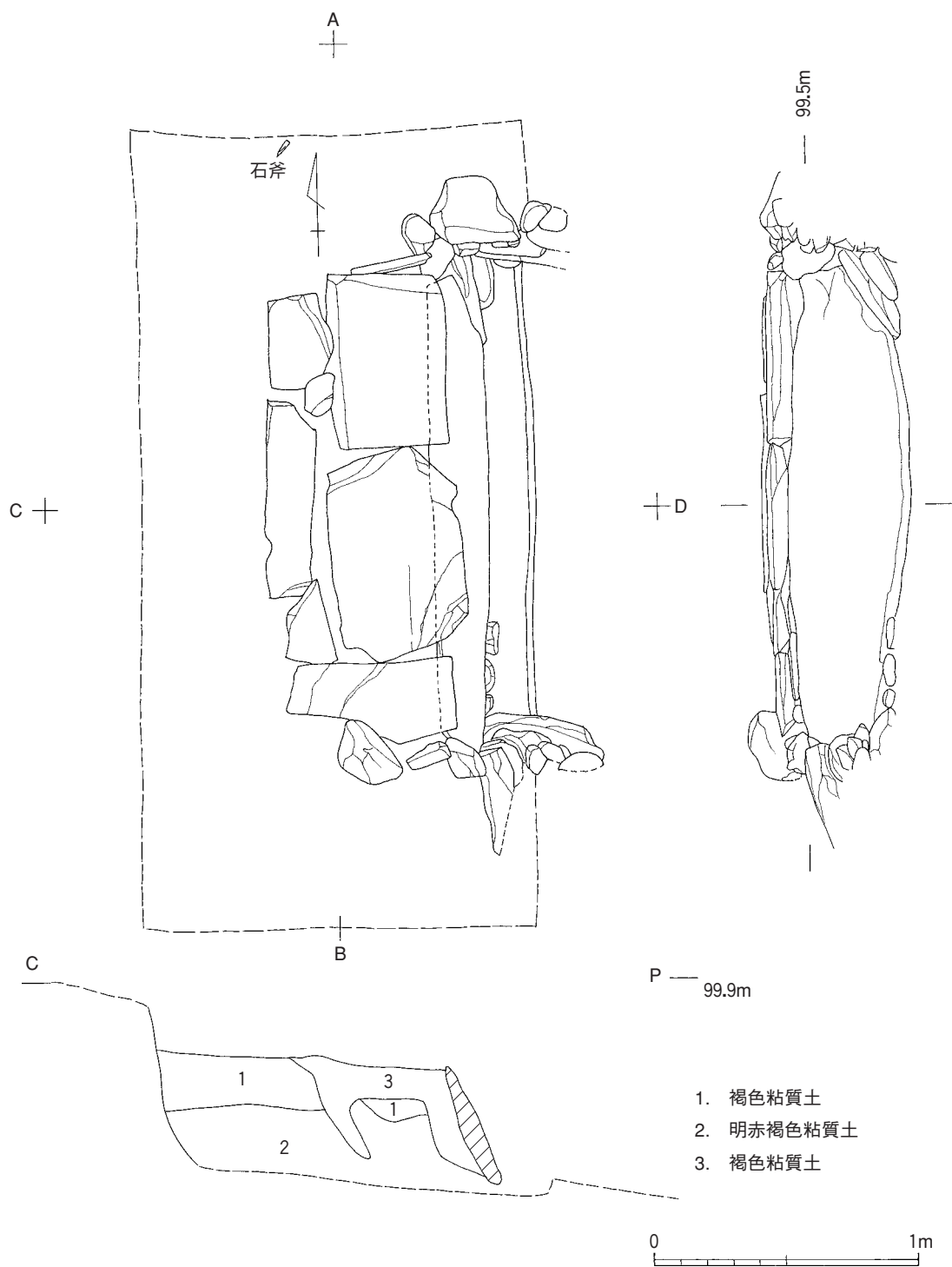


図3 少童神社祭壇実測図

丁寧に、石の周囲を発掘調査を進めていき、トレンチ北端から柱状片刃石斧（写真-1、図5-3）が出土した。最終的に蓋石の下から出てきたのは空洞ではなく、尾根の傾斜面であった。つまり、当初石棺と想定していた石は石棺の側石ではなく、古い時期の石段と考えられる（図3）。

今回の調査では、次の出土遺物が検出された。柱状片刃石斧1点（写真-1）、土師器片1点（写真-2）、布目瓦片2点（写真-3・4）、不明鉄器片1点（写真-5）、近世の大谷焼燭台1点（写真-6）である。（岡山真知子・三宅良明）

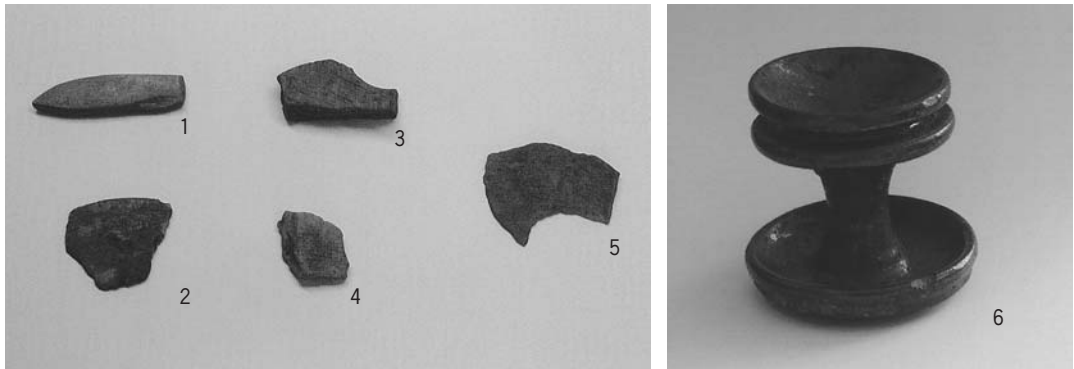


写真 出土遺物

（1 柱状片刃石斧 2 土師器 3・4 瓦 5 不明鉄器 6 大谷焼燭台）

3. 神山町出土遺物の研究—石器—

本年度の発掘調査で出土した石器はわずかに1点である。しかしながら、この1点のみを紹介するだけでは報告書としては不十分である。幸い、発掘調査と併行して神山町内出土の石器について資料調査をする機会を得、2点の石器の存在を知った（図5）。今回の報告ではこの2点の石器をあわせて紹介する。そして、なかでも特徴的な左右内鍋岩出土の石棒に注目し、県内出土の石棒を含めた考察を行いたい。

なお、石材の鑑定（肉眼観察）および原材獲得地の推定は、阿波学会地質班元山茂樹氏（徳島県立徳島工業高等学校教諭）によるものである。

1) 本年度調査出土石器（図5-3・写真1）

本年度の調査では、表土層より1点の石器が出土した。土器を伴わなかったため、明確な時期は不明である。ただし、柱状片刃石斧とよばれる木材の細部を加工するための道具で、弥生時代特有のいわゆる大陸系磨製石器であって、弥生時代に属することは確実である。長さ6.8cm・幅1.0cm・厚さ1.6cm・重量27.4gを測る。全面に丁寧に研磨を施し、使用痕は確認できない。石材は結晶片岩（点紋塩基性片岩）であり、本県三波川帯、すなわち遺跡付近で採集可能な石材である。

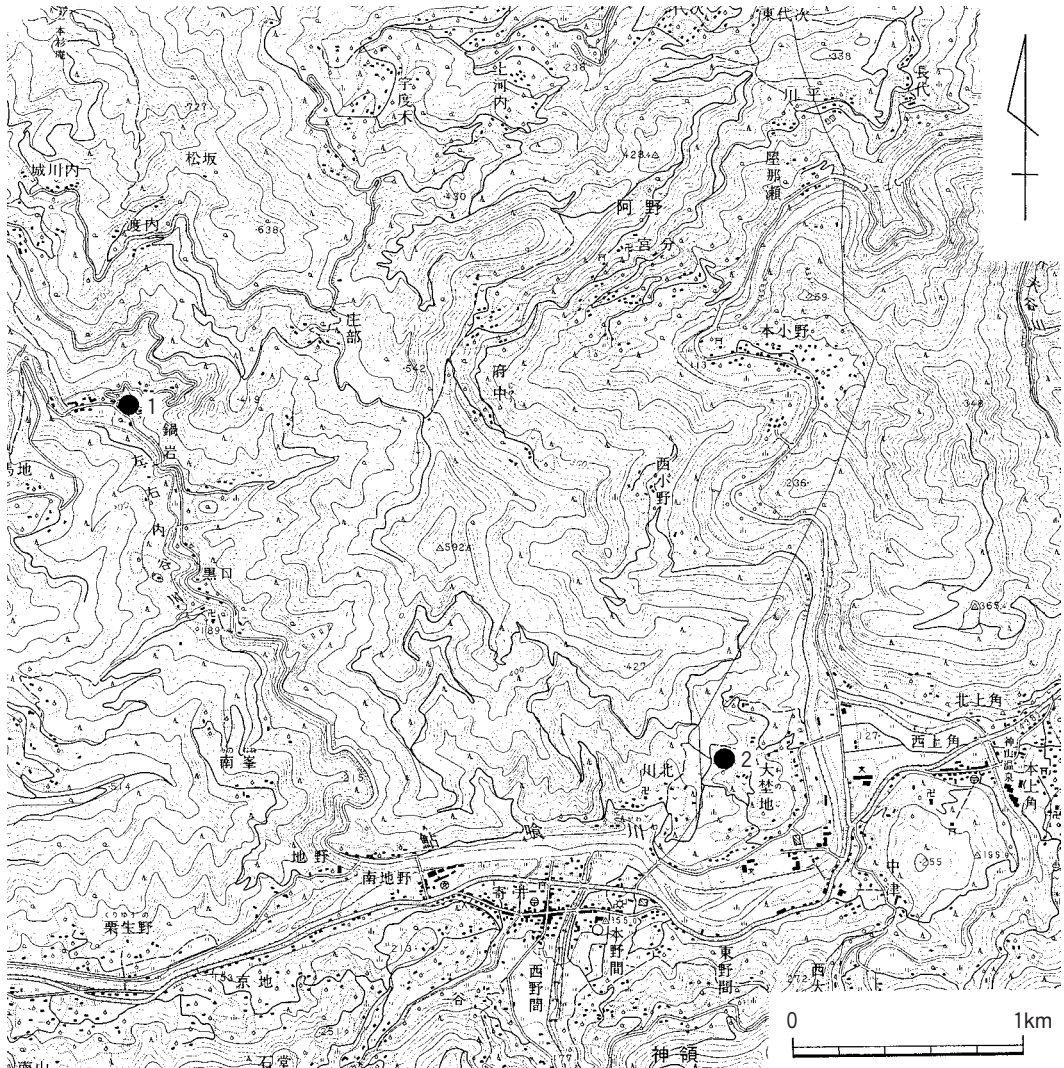


図4 神山町内石器出土地点 (1 石棒、2 磨製石斧)

2) 資料調査の成果

(1) 石棒 (図5-1)

左右内鍋岩より300年ほど前に出土した石棒である。川島へ抜ける県道と焼山寺参道の分岐点付近の左右内川東岸の段丘上からの出土である。残長45.0cm・幅11.2cm・厚さ9.2cm・重量8.8kgを測る。器面全体に丁寧な研磨を施す。石材は結晶片岩であり、本県三波川帯、遺跡付近で採集可能な石材である。現地を踏査してみたが、土器は採集できなかったので、明確な時期はわからないが、形態・製作技術から判断して縄文時代のものとみて間違いない。しかも、後述するように、縄文時代中期末から後期初頭に属する確率が高いといえるであろう。現在、徳島県立博物館に保管されている。

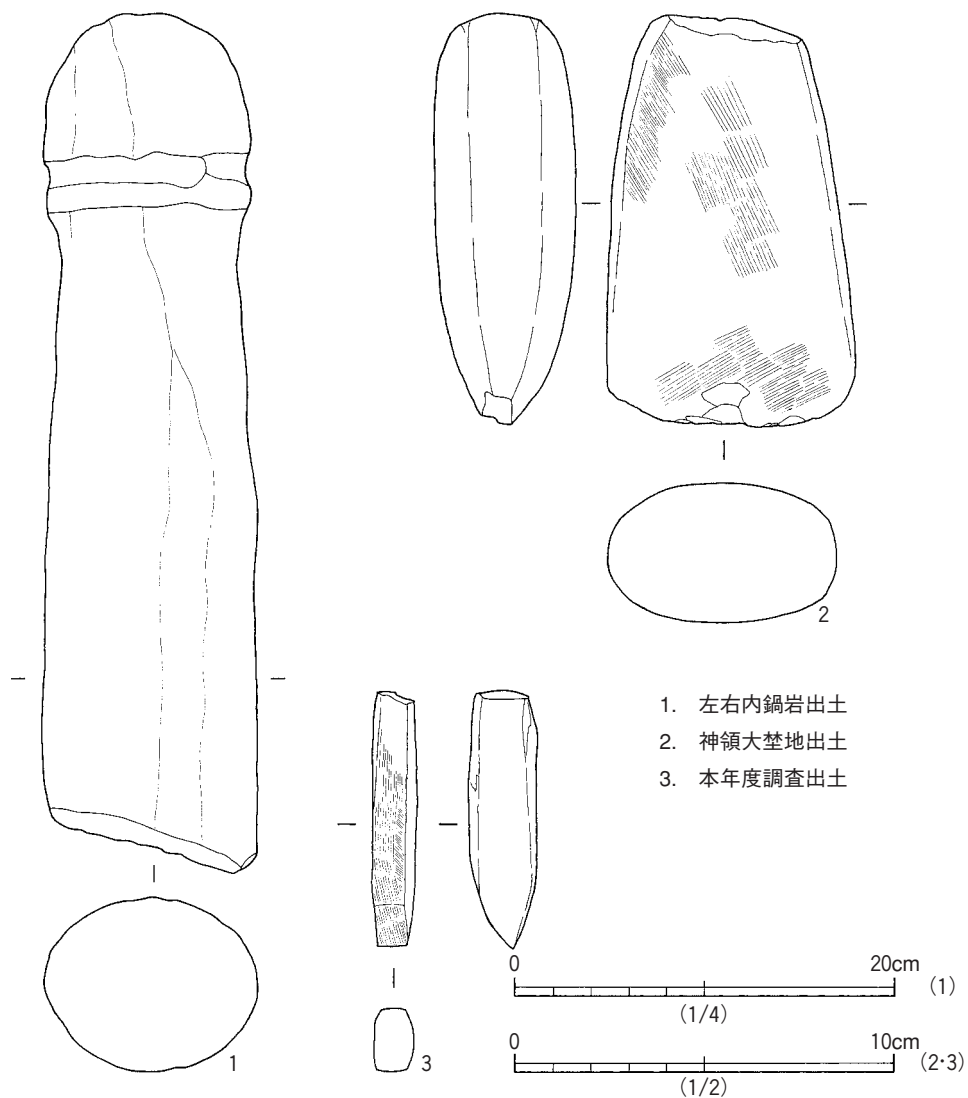


図5 神山町内出土石器

(2)磨製石斧 (図5-2)

神領大埜地じんりょうおのじより1961年に出土した磨製石斧である。ちょうど鮎喰川が東から北へと向きを変える所の近く、鮎喰川北岸の河岸段丘上からの出土である。長さ10.8cm・幅5.6cm・厚さ3.6cm・重量484.1gを測る。基部を除く器面全体に丁寧な研磨を施して仕上げている。刃部には使用痕が存在し、破損が著しく、破損後に再度研磨を施した痕跡も認めうる。石材は蛇紋岩で、本県御荷鉢帯・秩父帯で採集可能で、鮎喰川の転石中にも存在する。出土地点を訪れたが、土器を採集することはできなかった。したがって、明確な時期を決めることはできないが、基部の先端がとが尖らないし、体部断面がほぼ長方形を呈するという特徴

をもっているのが、弥生時代の伐採斧^{ぼっさいふ}と判断しておきたい。

3) 小結

以上3点は、遺構に伴ったものではなく、明確な時期を決定できない資料である。石材は、いずれも地元で容易に採集できるものばかりである。しかしながら、神山町内からは今のところ、縄文・弥生両時代に属する明確な集落跡はみつかっていないので、以上3点の位置づけは、今後の発見を待って論じる問題であると考え。そうしたなかでも、結晶片岩製の大型石棒の存在は重要である。なぜなら、それは集落のまつりにおいて機能するものであり、後世に持ち込まれたと考えない限り、付近に縄文期の、しかも相当な規模の集落があったことは、ほぼ確実といえるからである。

4) 徳島県内出土石棒に関する考察

最近、西日本においても縄文時代の遺跡、遺物が続々と出土しつつある。これは徳島県においてもあてはまり、ここ数年の発見は相当な数にのぼる。これに伴って、石棒の発見も相次いでおり、ようやくその内容が明らかになりつつある。

石棒は、縄文時代中期後半に東日本、とくに中部高地において発達した文物で、中期末から後期初頭にかけてのころ、西日本にももたらされた。おおむね直径10cmをこえる超大型品、直径5～7cm程度の大型品、直径2～3cmの小型品、直径1cm程度のものに4区分できよう。超大型品と大型品は、そのほとんどが光沢を生じない程度のやや粗雑な研磨仕上げの粗製品である。小型品は、丹念に研磨を施し、文様を刻むこともある。一方に刃部を作り出した石刀や両刃の石剣もこれに含まれる。直径1cm程度のものは岩偶とよばれることが多い。以上のような変化は、機能とともに、時間的な変化をあらわしている。超大型品のほとんどは、中期末～後期初頭の時期に限定できるものである（ただし、全長の短くないタイプは、晩期末まで残存する）。大型品は、中期末以降断続的に晩期末まで作られた。小型品は、後期の中葉から晩期の前半にかけてつくられ、石刀・石剣のほとんどは晩期の前半につくられたものである。

私が、今までに集成したところ、徳島県内では、16遺跡から57点の石棒（石刀・石剣・男根状の岩偶を含む）が出土している。このうち、6遺跡からの7点（例外は除く）が超大型品である。また、貞光前田遺跡からの例は後期初頭の土器に伴うものである。他県での例をも参考にする限り、超大型品が縄文時代中期末から後期初頭にかけて作られたことは、ほぼ間違いがないといえるであろう。以上をふまえると、神山町発見の石棒の時期もある程度推測可能である。すなわち、残長45.0cm・幅11.2cmを測る本例は、縄文時代中期末～後期初頭に属する可能性が高いといえる。

四国地方では、75点の石棒が出土している。注目すべき点は、このうち57点（76%）が徳島県からの出土であるということである。実に四国の石棒の8割近くが徳島県に集中し、

他三県ではそれぞれ香川県3点、愛媛県7点、高知県8点と非常に少ない。また、未製品、素材も徳島県のみで出土する。おそらく、四国の石棒生産はほとんど徳島県でおこなわれ、他三県は供給を受けていたとみるべきであろう。そして、他三県でほとんど出土しない理由は、石棒を用いた儀礼がさかんではなかったからである。

それでは、なぜ徳島県でのみこのように多量の石棒が出土するのであろうか。石棒を用いた儀礼は、東日本でさかんにおこなわれたものであり、特に近畿地方以東で多くが出土する傾向にある。吉野川が形成した徳島平野は東を向いて開いており、縄文時代においては、徳島県はむしろ東日本の縄文文化の窓口である近畿地方との交流を通して、石棒を用いた儀礼もさかんにおこなったのではなかろうか。また、近畿地方では石棒にさまざまな石材を用いているが、最も多いのは結晶片岩製である。徳島県はちょうど結晶片岩の産出地にあたり、石材の供給源として重要な役割を担っていたのである。

神山町出土の石棒はわずかに1点にすぎない。しかしながらこの1点が、徳島県の縄文文化の特色を探る上で、貴重な情報を提供しているといえるであろう。 (中村 豊)

4. おわりに

今回実施した少童神社の調査では、残念ながら神山町の期待に反する結果となってしまった。しかし、弥生時代の石器である柱状片刃石斧が出土し、周辺に弥生時代の集落の存在を予感させてくれた。また、調査中に神領大埜地より磨製石斧の出土を知り、紹介できた。そして、以前から出土していた左右内鍋岩出土の石棒について、現地調査を含め、詳細な検討を加えることができ、縄文時代研究にも貢献できる成果を得ることができた。以上が今回の成果である。

最後に、調査中にご指導いただいた神山町文化財保護委員会・神山町史編集委員会・神山町教育委員会の方々、調査を快諾し、御祓いまでしていただいた少童神社森登宮司をはじめ氏子の方々、資料提供していただいた方々に感謝の意を表します。 (岡山真知子)